献　　辞

西村周三先生は，2008年10月７日に満63歳の誕生日を迎えられ，2009年３月14日に百周年時計台記念館で多数の学生，卒業生を聴衆として最終講義「日本の社会保障の未来」を行われました。西村先生は，理事・副学長として引き続き京都大学に奉職されますが，京都大学経済学部教授として一つの区切りをつけられることになります。

西村先生は，1969年３月に京都大学経済学部を卒業，1971年３月に京都大学大学院経済学研究科修士課程を修了，1972年４月に京都大学経済研究所助手に採用されました。さらに，1975年４月には横浜国立大学助教授として赴任され，1981年４月に本学経済学部助教授に転任，1987年４月に同教授となり，現代経済学講座を担当し，保険論，医療経済学，サービス経済論の教育・研究に多大の業績を残すとともに，多数の後進を育成し指導されてこられました。西村先生の指導された学生が，本学のみならず，東京大学，一橋大学，大阪大学など日本の主要大学，さらには米国の主要大学にも広く在籍され，最も active な経済学者として活躍されていることは教育者として特筆すべきことです。

先生の研究分野の中心は医療問題の理論的・実証的分析です。1970年代はじめから，医療保険制度，病院の医療供給行動，医師や看護師などの医療従事者供給といった問題の分析に取り組まれました。先生の分析や指摘は今日にわたるまで色褪せず，1987年に発表された『医療の経済分析』（東洋経済新報社）は，現在でも医療経済学の基礎文献として他の研究者に引用されています。その後も，終末期医療，医療サービスの経済評価，介護保険などに関する活発な研究を行っておられます。また先生の研究業績は，医療従事者や医学・薬学・倫理学などの他分野の研究者と共同で行われたものも多く，医療の現状を多面的に分析するという医療経済学のスタイルを確立させた，まさに第一人者といえるでしょう。

先生は，医療のみならず年金や福祉など社会保障全般に関しても幅広い研究を行っておられます。さらにミクロ経済学の分野では，人間行動の限定合理的な側面にいち早く着目され，経済心理学，後に行動経済学として発展する分野においても，理論的な分析に加えて，喫煙や肥満などに関する実証分析を行ってこられました。先生は常々「人間はなぜ誤るのか」をライフテーマとされ，経済学の枠の中で，時には経済学の枠を越えて語る軽妙洒脱な西村節は，学界の内外でも多数のファンを獲得しているとも言われます。このような逸話も先生の人間的魅力を語る上で重要なエピソードと申せましょう。

先生は，1999年10月から2000年３月，さらに2004年４月から2006年３月まで京都大学大学院経済学研究科長および同経済学部長を務め，学部の運営に尽力されました。特筆すべきは，先生が研究科長時代に，経営管理大学院と公共政策大学院の設置に主導的役割を果たされ，本学経済学研究科との密接な連携のもと，２つの専門職大学院は順調に社会的プレゼンスを高めています。さらに，先生は2006年４月から国際交流・情報基盤担当の理事・副学長を務め，本学の教育・研究を国際的に展開していくための拠点作りに多大な貢献をされました。2008年10月からは教育・学生・国際担当の理事・副学長に就任され，京都大学の全人教育の実現に日夜奮闘努力を続けておられます。この間，先生は，医療経済学会の会長や日本経済学会，日本財政学会，日本保険学会の要職を勤め，政府委員など社会的活動にも数え切れないほどの尽力をされました。

こうした先生の多年にわたるご功労に対する敬意と感謝の気持ちを込めて，『経済論叢』の本号を記念号として編集いたしました。先生とゆかりのある方々から寄せられた論文を編んで，本号を先生にお贈りできますことは，私どものこの上ない慶びとするところであります。

先生が今後ともますますご健康で，京都大学，経済学，広く社会のために，ご活躍なさいますことを心から祈念いたします。

2009年３月31日

京都大学大学院経済学研究科長・経済学部長　森　棟　公　夫